

第四章 商工業

一 合併前の商工業の概要

久万町の商工業は、四国霊場四四番札所大宝寺の門前町、また松山から高知に至る土佐街道の宿場町として発展し、しだいに上浮穴郡の政治、文化の中心地として人々が集まり栄えた。あわせて、明治初期から井部栄範らの造林、植林の結果自然条件にも恵まれ林業の町として脚光を浴びるようになり、明治三〇年ごろには、既に現在に近い商店街が形成されてきた。

その繁栄は、第二次世界大戦ごろまで続いていたが、戦争であらゆる物資が軍用として供給されるようになった結果、食料品・衣料品等の統制、配給制が行われ、当町の商工業も火の消えたような状態であった。しかし戦後、経済復興と呼ぶにふさわしい動きは、製材業から始まった。戦争で焼失した都市での住宅建設は急務であり、昭和二五年六月に起った朝鮮戦争が呼び水となったと言われるように木材需要は大幅に増

大し活況を呈するようになり、このころから日本経済は急ピッチで回復に向かっていた。

当時、久万町には、従業員五人〜二〇人程度の製材所一三工場が操業していた。

昭和三〇年代に入ると、生活様式の大変革で戦前にみられなかった電化製品や木炭に代るプロパンガス等の普及で、庶民生活が一変した。

そして昭和三五年の「国民所得倍増計画」の機運等により財政規模が大型化し、公共投資——社会資本の形成が活発にな

明治43年末久万町業種別事業者数

業種名	軒数	業種名	軒数	業種名	軒数
穀物商	5	蹄鉄工	1	人力車業	16
呉服商	5	木挽	4	運送業	3
度量衡器商	1	桶屋	5	サービス業計	56
食塩商	6	大工	15	酒造	4
煙草商	6	瓦職	2	醬油製造	2
肥料商	1	左官	2	製絲	1
小間物商	4	石工	5	製紙	2
菓子商	4	土木請負	3	瓦製造	1
金物商	1	鍛冶屋	5	経木 ^{きょうぎ} 真田 ^{まいた} 業	2
菜種商	1	印刷	1	畳屋	2
精米	2	工業計	43	製造業計	14
物産商	5	湯屋	2	質屋	4
自転車商	1	理髪	6	銀行	1
写真商	1	髪結	3	新聞売 ^{きば}	1
書籍商	2	料理館	3	開業医	5
古傘提灯	4	旅館	4	産婆	1
時計商	2	木賃宿	9	彫刻	1
鮮魚	2	芸妓屋	3	代書本	9
商業計	55	あんま	5	貸	2
		周旋屋	1	三味線師匠	2
				その他計	26

所業別戸数

	農業	林業	工業	商業	交通	公務員及び自由業	その他	無職	計
昭和3年末	本業 260		50	250	8	55	25	30	678
	副業 30	6	22	25	3	7	18		111
昭和14年末	本業 286		52	184	50	112	62	10	756
	副業 25	15	9	15	10				74
昭和20年末	本業 272		32	254	24	92	41	28	743
	副業 18	7	11	25	9	8	15		93

産業別事業所数、従事者数の推移

区分	年度	昭和35年	昭和44年	昭和50年	昭和53年	昭和56年	昭和61年
第2次産業	鉱業	3戸 27人	4戸 41人	3戸 16人	3戸 70人	3戸 48人	3戸 54人
	建設業	35 153	40 223	56 339	54 448	49 511	47 396
	製造業	34 248	39 336	37 328	41 356	38 426	46 555
	小計	72 428	83 600	96 683	98 874	90 985	96 1,005
第3次産業	電気・ガス水道業	2 18	10 31	16 36	15 37	3 23	3 24
	運輸通信業	24 165	20 247	18 233	14 207	13 195	13 176
	卸・小売業	304 642	302 737	267 674	275 726	268 764	237 663
	金融保険業	11 68	5 48	3 48	6 40	6 49	5 52
	不動産業	1 ×	6 7	5 5	7 8	6 7	7 8
	サービス業	172 670	178 836	176 905	176 857	149 916	138 844
	小計	514 1,563	521 1,906	469 1,901	493 1,875	445 1,954	403 1,767
総数	586 1,992	604 2,506	515 2,584	591 2,749	535 2,939	499 2,772	

注1 公務は除く。(上段) 事業所数……戸、(下段) 従事者数……人
2 商業統計による。

昭和三五年以後、政府主導による事業実施で、年平均九%を超える成

二 合併後の商工業の概要

されるようになってきた。

卸・小売業・飲食店の推移

年度	卸 売 業			小 売 業			飲 食 業			合 計		
	商店数	従業員数	年間販売額	商店数	従業員数	年間販売額	商店数	従業員数	年間販売額	商店数	従業員数	年間販売額
昭和39年	31	83	305	183	362	573	30	60	20	244	505	898
昭和41年	30	82	406	197	424	667	35	86	34	262	592	1,107
昭和45年	11	40	244	206	444	1,256	38	104	131	255	588	1,632
昭和51年	14	54	890	201	505	3,091	38	114	320	253	673	4,302
昭和54年	15	47	610	189	437	3,348	47	129	482	251	613	4,441
昭和60年	18	96	1,625	198	502	4,789	51	81	562	267	649	6,976
昭和63年	16	91	2,600	186	521	4,897	34	103	358	236	715	7,855

商業統計による (単位: 戸・人・百万円)

工場数の推移

区 分	年 度	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	昭和62年
工 場 数		37	27	28	38	50	44	31
従 業 員 数 (人)		288	236	309	408	659	578	493
製造出荷額等 (百万円)		373	483	641	1,884	3,547	3,239	3,375

工業統計による ・昭62、数値は4人以上の工場対象

長率を占めるようになり、近代技術革新や流通機構の変革で、その労働力源として地方の若者の都市集中化が起こり、当町もその影響を受け年々人口が減少してきた。

このことは、購買力の減少に直接つながり、必然的に合理化・近代化の遅れている商業者にとって痛手となった。

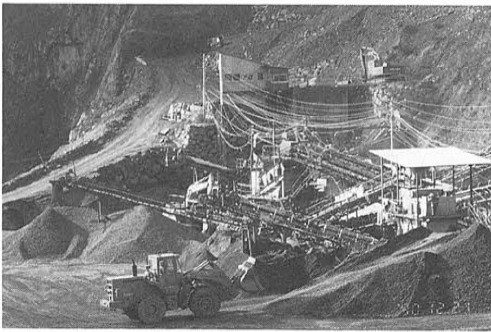
また、自動車の普及や各交通機関の発達・国道三三号線の改修（昭和四二年）で久万く松山間の所要時間が大幅に短縮され町内はもちろん、郡内の顧客の松山流出があらわれるなどきびしさを増してきている。

昭和六三年現在の商店数は、二三六戸・従業員数七一五人・販売額七八億円という規模であるが、業種形成にも特性がないため活気に乏しいといえるが、合併時にくらべ、昭和五〇年代から飛躍的な増収が続いており高度経済成長がもたらした好調な波は今なお続いている。

しかし石油ショック（昭和四八年）以後、庶民はエネルギー危機に対する商品需給の見通しに多かれ少なかれ不安を抱いており、省エネ志向が深く浸透するようになってきているのも事実である。

このような状況にあつて、地域経済に活力を与え、将来の商業の発展をはかるためには、商店街の近代化、企業の集団化等、かつ効果的な施策が必要であると、昭和五四年から商業近代化対策を摸索研究していたが、このほど地元八店の共同店舗と久万農協Aコープをドッキングさせたショッピングセンター計画が具体化してきたのは注目される。

工業部門において、近年特に目立った動きはないが、昭和六二年現在工場数三一、従業員数四九三人、製造出荷額は約三三億円である。昭和三五年と対比すると、工場数で六の減であるが従業員数で二〇五人増加



砕石場



縫製工場



磨き丸太の生産



コンクリートブロック工場

しているものの工業集積度は相変わらず低い。

このうち、木材関連の工場が一〇あり、従業員数は一二五人で、年間の製材量は二万九八〇〇立方尺である。(総素材生産額の二五%)

昭和四四年に開設された県森連久万山木材市場を契機として現在、町内には五つの素材市場があり、有利性を生かして、一次産品に付加価値を与える工業の開発を図り、若年層の雇用の場を確保してゆかねばならない。そのほか、昭和四九年に操業を開始した株式会社クマテックスや、地元縫製関係の工場などがある。